北海道医歌人会詠草

霧と氷のミラノ

函館　水関（みずせき）　清（きよし）

アリーナが「亜美」ひと色に染まる宵　笑顔はじけし　トリプルアクセル
シンクロの精度とダイナミックさと　ともに求める　競技の女神
「どれだけ難しい形で成功したか」を問ふ　出来栄え点は　女神の眼差し
ペアスピン　スロージャンプにリフトあり「りく」の笑顔と「りゅう」の涙目
須賀敦子「ミラノ　霧の風景」に重なりし　25回目の五輪の記憶

夏の記憶

士別　竹内（たけうち）　幹夫（みきお）

蝉しぐれこぼるる空のまばゆさに我が胸深く夏をたたへむ
水底に沈む影あり揺らぎつつ記憶のごとく遠く呼び交ふ
風通ふ杜のすきまに透きとほる　ひかりは我が身の奥処をも射す
やはらかく落葉のかげを踏みゆけり過ぎし日々への祈りを抱き
杜の樹はしだいにあをを失ひて陽のいろ残し透きとほりゆく

冬過ぎて春来にけらし

滝川　村田（むらた）　英俊（ひでとし）

この冬は札幌に雪多く降る気まぐれな寒太郎のせいだ
豪雪にダイヤは乱れて待ちわびる乗客のわれは穏やかならず
ジャンプ台を上から見れば滑り降り跳ぼうだなんて翼竜なのかい
川沿いに白き花咲く枯れ木群「霧氷」唱いし歌手今は亡く
天象は人意で為せると思いしが気温一度さえなお儘ならず

銀杏

札幌　浜島（はまじま）　泉（いずみ）

強風と夜来の雪に　ギンナンが舗道に散りて落ち葉彩る
問ひかけも一たびにては伝はらず　表現（へうげん）を変へ繰り返し言ふ
風と雪予報どほりに吹き溜まり　繰り返し除（よ）け踏みて固めつ
人がみな抜き去りてゆく凍る道　滑らぬやうに踏みしめて行く
泥含む雪の氷が溶けゆくに　宝石色にいっとき光る

「生きる」とは

釧路　児玉（こだま）　昌彦（まさひこ）

知り合って五十八年　別れない秘訣は互いの心の棲みわけ
一つのこと続けることの難しさ　まして味濃く長く生きるは
万巻の書を積み上げてもまだ足りぬ不明のことの次々湧きて
夢みるため人みな生きる夢のなき人生はそも生きるに難し
「食べること」それが即ち「生きること」経管（くだ）ではつかめぬ生きてる感触

春　2026

北広島　古屋（ふるや）雅三知（まさみち）

温暖化　今年の春は早くして弥生の里に積雪は無し
いつもならこの時期に来（こ）し白鳥の声も聞かれぬ刈穂の畑野
長閑（のど）けしや　陽（ひ）温かくして風凪て逆さ羊蹄洞爺に浮かぶ
斑雪（はだれゆき）　黒土の間に蕗のとう　白き花咲き春を告ぐるや
野に出でてビニールハウスの屋根を張る農夫のかげの三つ四つあり